勢多だより No.96 (2013.7.12)

著者	「勢多だより」編集担当者会議
発行年	2013-07-12
その他の言語のタイトル	Seta dayori No.96 (July 12, 2013)
URL	http://hdl.handle.net/10422/6011

滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。「中心に向かって、外からさざ波の波動ーこれは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動ーこれは人々の期待に返す答えである。」

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

JULY 12, 2013 No. 96

平成25年度新入生歓迎

平成25年度入学宣誓式
新任教員紹介

- 第38回浜松医科大学との交流会
- 平成25年度新入生研修
- 平成24年度卒業式

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI
JULY 12, 2013

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
JULY 12, 2013

C O N T E N T S

メインテーマ：「平成25年度新入生歓迎」

トピックス

01 平成25年度　入学宣誓式
03 平成25年度　新入生紹介

新任教員紹介

06 社会医学講座（法医学部門）　准教授　古川智之
07 臨床看護学講座（成人看護学）　講師　森本明子
08 公衆衛生看護学講座　講師　坂東春美
09 麻酔学講座　准教授　北川裕利
10 公衆衛生看護学講座　講師　輿水めぐみ

キャンパスライフ

11 第38回　浜松医科大学との交流会
13 平成25年度　新入生研修
16 リーダース研修
17 医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

図書館からのお知らせ

18 わたしがすすめるこの本2013

国立病院機構　東近江総合医療センターだより

22 「滋賀病院」から「東近江総合医療センター」へ
滋賀医科大学総合外科学講座　教授　来見良誠
23 内視鏡センターの紹介と役割
滋賀医科大学総合内科学講座　教授　辻川知之
25 技術と最新設備で外科系診療科を支える麻酔科
滋賀医科大学総合外科学講座　客員准教授　藤野能久
26 小児科の紹介
滋賀医科大学総合内科学講座　非常勤講師　田中政幸
27 南3病棟（産婦人科）の紹介
滋賀医科大学総合外科学講座　非常勤講師　井上貴至
28 病院歯科としての歯科口腔外科
滋賀医科大学総合外科学講座　非常勤講師　堤泰彦

インフォメーション

29 平成24年度　卒業式
33 平成24年度　学位授与式
34 平成24年度　学位論文学長賞等授与式
35 男女共同参画推進のための講演会
36 名誉教授の称号授与
第36回解剖体納骨慰霊法要

編集後記（宮松編集長）

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
JULY 12, 2013

編集後記

先日学会で金沢を訪れた際に旧友に会い、露堂々（つゆどうどうと読みます）という日本酒をいただきました。雑味のない素晴らしいお味でした。

禅語で「明歴々露堂々（めいれきれきろどうどう）」とは、存在が明らかにはっきりと現れているさまを意味し、真理は一木一草の上にも顕露しているということだそうです。

新入生の皆さんがこれから滋賀医科大学で過ごす6年あるいは4年の間、こころの目をしっかりと開いて、様々な体験から多くを学び感じとっていただければと思います。…ただし、お酒は二十歳になってから。

編集委員長　宮松　直美

（勢多だよりの由来）

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

勢多だより　No. 96
発行年月日：平成25年7月12日
編集：「勢多だより」編集担当者会議
発行：滋賀医科大学広報委員会

トピックス

平成25年度　入学宣誓式

学長
馬場忠雄

入学式告辞

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。本日はお忙しい中、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様、また教職員の皆様、誠に有り難うございます。

本日、医学科100名、看護学科70名（編入学生10名を含む）の入学生を迎え、キャンパスに若々しい活気が満ちあふれる喜びを感じております。これまで諸君を支えてこられたご両親、ご家族の皆様に心よりお慶び申し上げます。

本学は、学問を学ぶにふさわしい緑豊かな自然環境に恵まれ、周辺は大学や県の文化施設があり、文化ゾーンとなっております。そして、優秀な教員を揃えて、充実した医学・看護学の教育研究を提供する体制を整えています。本学の教育の基本は、幅広い教養を身につけ、倫理観に裏打ちされた信頼される医療人の育成であります。絶えず自己研鑽し、倫理観を養い、医学・看護学の基本的知識と最新の知見を学び、社会に奉仕する医療人として、あるいは、基礎・臨床の教育研究者として、また、今注目されているメディカルイノベーションの領域、あるいは国際医療の場で活躍するなど多様な人材の育成を目指しております。若い諸君は、無限の可能性をもっており、いろいろなことに挑戦して下さい。

医療・福祉の現場では、他者の話に耳を傾け、事柄を理解し、その上で自分の知識と客観的証拠に基づいて、説明し、行動する能力が求められます。このような能力は、幅広い知識の上に努力して徐々に積み上げられてくるものです。本学においても、一般教養として文系の科目を用意しています。本学は、学生が国家試験に合格するためだけの教育を行っているものではありません。地域の方々と共に学ぶカリキュラムも取り入れ、医療人として、信頼される人格をもった人づくりを基本としています。また、課外活動として体育系、文化系のクラブ活動も盛んで、多くの友達と共に活動を通して体力や英気を養って下さい。

医学科では、平成35年度に国際水準による医学教育分野別の認証評価を受けるために、臨床実習の充実に向けた取り組みを進めています。すなわち、参加型臨床実習に対して、市民の方々の理解と協力及び学生の自覚を高めるためにStudent Doctor制を導入していますが、さらに、臨床実習の客観的な評価を行い、質の向上に努めます。

看護学科では、平成24年度から、看護師、保健師と助産師課程の教育の充実を目指し、教育課程が改正され、3年次に保健師課程30名、助産師課程8名の選択制になりました。将来、取得した資格を十分に生かすことを念頭において選択して下さい。

大学院博士課程に進学された28名、修士課程に進学された18名の皆様、ご入学おめでとうございます。医学・看護学に対する社会のニーズは多様化し、学際的な生命科学研究や創薬に携わる人材のほか、介護、福祉、国際医療協力など様々な分野においてリーダーとなれる医療人が求められています。

研究の新しい発想は、先人の研究を詳細に検討することから生まれてくるといわれます。考えるばかりではなく、実験してはじめて、その方向性がわかるものだと思います。困難な状況が生じるかもしれませんが、その壁を乗り越えたときに優れた研究成果が得られます。医学生命科学の分野は、日々凄まじい進歩を遂げており、その一角に食い込むように日夜努力して下さい。また、看護学の分野においても、新しい医療技術

の導入とともに、患者のケアが重視され、患者の視点に立った看護研究の成果が期待されています。

本学は、教育課程を充実しつつ、研究においてもサルを用いた再生医療、神経難病、MR分子イメージング、総合がん治療など、また、個々の研究者の研究においても優れた業績が上がり高い評価を受けています。4月から、今まで本学の疫学研究の実績を発展して、アジア疫学研究センターが発足し、アジアにおける生活習慣病を中心とした共同研究や研究者の人材育成を行うため、海外から教授を迎え、留学生も受け入れることになっています。一方、産学連携によるメディカルイノベーションは、低侵襲医療機器開発と実用化に向けて実績を上げており、企業や外国との共同研究、また、特許件数も増加しています。

附属病院は、病院機能が充実し、国公私立大学附属病院のなかでもトップクラスの実績を有し、また、地域から期待されているオーダメイド医療やダヴィンチSiによる内視鏡ロボットなどの先進医療や高度医療を行っています。

このように本学は、教育、研究、診療において高い質を提供しており、諸君は、本学において学ぶことに誇りをもっていただくと同時に、本学の一員として本学を支える気概で日々研鑽してください。

ところで、新入生の皆様、滋賀県の重症心身障害児施設「近江学園」を創設された、糸賀一雄先生のことをご存知でしょうか。今年は生誕100年にあたります。糸賀一雄先生は1914年3月に鳥取県で生まれ、旧制松江高校から京都帝国大学文学部哲学科を卒業し、1940年、滋賀県庁に社会教育主事として奉職、秘書課長などを歴任しました。戦後の混乱期のなかで巷にあふれる戦災孤児、障害児を放置できなく、1946年大津市に「近江学園」を創設しました。終戦後の食糧をはじめ物資不足で、生きることに精一杯な状態での孤児、障害児の施設事業は困難を極めました。しかし、近江学園の三条件、すなわち、「耐乏生活」、「四六時中勤務」、「不断の研究」を職員のモットーとして、これに共感する若者たちや、新しい日本を創る意欲あふれる人たちに支えられ、糸賀先生らの取り組みは発展し、新しい施設を次々と創設してゆきます。1963年に重度心身障害児施設「びわこ学園」を創設します。糸賀先生は、多くの様々な障害児らと接し、「この子らはどんな重い障害をもっていても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということを、認めあえる社会をつくろうということである。「この子らに世の光を」あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。「この子らを世の光に」である。この子らが、生まれながらにしてもっている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである。」と。

そして、糸賀先生は、滋賀県児童福祉施設等新任職員研修の講義中に倒れ、54歳の生涯を閉じました。このように糸賀先生は、困難な状況にあっても、仲間と共に献身的な活動により、重度心身障害児の福祉に大きな貢献をされたのであります。諸君の先輩達も、「びわこ学園」や国立病院機構「紫香楽病院」などの重症心身障害児施設に勤務し、日夜苦楽を共にしています。

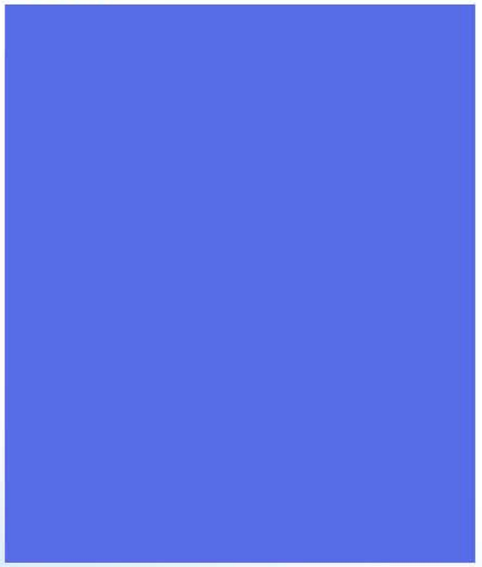
新入学生諸君、本日は、目的を達成した日ではなく、医学、看護学を修めるスタートの日であります。在学中には、多様な考え、好奇心を大切にし、目的を明確化したあとは、どんなに苦難の険しい道であろうとも忍耐強く取り組む丈夫な身体と強い精神力を養って下さい。大学には諸君の好奇心を満足させる多くのシーズがいっぱいあります。大学は、諸君の希望や志を力強くサポートいたします。

新入生諸君は「志」を高く持って日々精進し、信頼される医療人として、また世界に羽ばたく研究者として、本学で自分自身を磨いて大きく成長してくれることを期待し、学長告辞といたします。

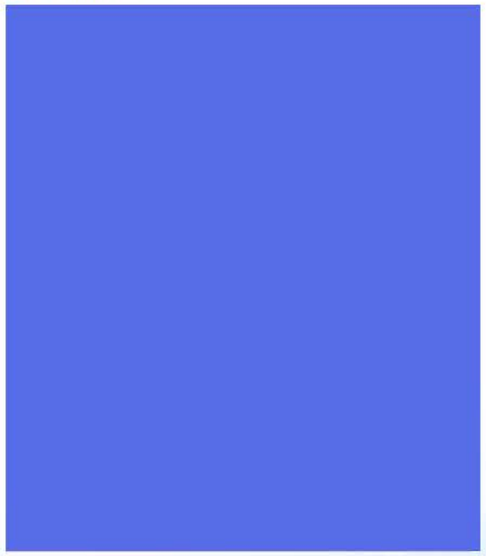
平成25年4月3日

医　学　科　新　入　生

■医学科Aクラス



■医学科Bクラス



■医学科出身校所在地都道府県別入学者数

都道府県	男	女	小　計
北 海 道	1		1
東　　京		2	2
神 奈 川	1		1
長　　野	2		2
岐　　阜	1		1
静　　岡	2		2
愛　　知	1	1	2

都道府県	男	女	小　計
三　　重		1	1
滋　　賀	11	5	16
京　　都	12	12	24
大　　阪	8	11	19
兵　　庫	6	4	10
奈　　良	11	1	12
岡　　山	1		1

都道府県	男	女	小　計
徳　　島		1	1
愛　　媛	1	1	2
福　　岡	2		2
高卒認定		1	1
合　　計	60	40	100

看　護　学　科　新　入　生

■看護学科

■看護学科編入学者

■看護学科出身校所在地都道府県別入学者数

（第１年次入学者）

都道府県	男	女	小　計
長　　野		1	1
岐　　阜		1	1
静　　岡		1	1
愛　　知		2	2
滋　　賀	2	17	19
京　　都	2	23	25

都道府県	男	女	小　計
大　　阪		7	7
兵　　庫		2	2
鳥　　取		1	1
広　　島		1	1
合　　計	4	56	60

（第３年次編入学者 ）

都道府県	男	女	小　計
岐　　阜		1	1
滋　　賀		2	2
京　　都		5	5
大　　阪		1	1
奈　　良		1	1
合　　計	0	10	10

大学院　医学系　研究科

■大学院博士課程入学者

■大学院修士課程入学者

入学生宣誓

在学生歓迎の言葉

新任教員紹介

社会医学講座
（法医学部門）

准教授　古　川　智　之

2013年2月1日付けで、滋賀医科大学社会医学講座（法医学部門）准教授に就任致しました。

私は2001年、滋賀医科大学21期生として卒業し、柏木厚典現病院長のもと御指導いただき、内科と救急・総合診療部を研修しました。その後赤穂市民病院内科において高原典子内科部長の指導を賜り、休日・深夜を問わず病院からのオンコールを受け続けました。今思えばその頃の初期研修が後の研修に大いに役立ったといわざるを得ません。赤穂市民病院での2年間の勤務の後、研修医時代にICU部門でお世話になった救急集中治療医学講座の江口豊教授のもとを訪れ、4年間勉強させていただきました。私はスーパーローテート研修ではなかったため当初は皮膚の縫合すらできませんでしたが、救急部の先生方のご厚意で外科処置や外傷診療に携わることができました。他の施設では到底考えられなかった私のステップアップです。内科学、救急医学に従事しているうち、日々の診療の中で解決できない疑問が増え、法医学について学問的に少し勉強したいという思いが芽生え、西克治教授のもと相談にお伺いした次第です。教授は快く教室に迎えてくださり、当時法医学の知識のない状態から御指導いただきました。まだまだ勉強中ですが、法医学を学ぶことによって医療や社会の全体像が見えてまいりました。

病院では様々な疾患をお持ちの方がおられ、医療従事者がおられ、同部門でも先輩後輩が働いています。大学といった大きな組織でどのように人と接していくか大変勉強させていただきました。当直勤務明けにホテルや料亭に食事に出かけ、また人工透析中つまらなく時間を過ごしておられる患者様が私の服装に興味を示したことから、ファッションやお買い物を楽しむようになりました。救急医療では今後どのようになる可能性があるか、法医学では逆にどのような事象があって現在に至っているのか、を学んできましたが、これは料理を作る・いただくといった過程とも共通します。内科や救急では一瞬の判断を後で後悔することを経験します。これも医療だけのことではないと思います。解剖受入式に同席する機会も出てまいりました。倫理教育にも触れ人としてレベルアップできています。これまで良き指導者に恵まれ今の自分があります。医療だけでなく医学を通してこれからも日々の生活と向き合っていきたいと思います。

経歴

2001年 3月　滋賀医科大学医学部卒業
2001年 6月　滋賀医科大学医学部附属病院研修医（第3内科）
2003年 4月　赤穂市民病院　内科勤務
2005年 4月　滋賀医科大学　救急集中治療医学講座　医員
2005年10月　滋賀医科大学　救急集中治療医学講座　助手
2009年 4月　滋賀医科大学　法医学講座　助教
2012年 1月　滋賀医科大学　法医学講座　講師（学内）
2013年 2月　滋賀医科大学　法医学講座　准教授

臨床看護学講座
（成人看護学）

講　師　森　本　明　子

2013年4月1日付で、臨床看護学講座成人看護学領域の講師を拝命致しました。生まれは大阪ですが、本学医学部看護学科に入学以降、多くの時間を滋賀で過ごしており、看護学科棟から見える比叡山と琵琶湖がとても好きです。

私は本学医学部看護学科を卒業後、本学大学院修士課程に進学し、その後、本学医学部附属病院で看護師として循環器、呼吸器、救急の病棟で勤務しました。この度、教員として迎え入れて下さり、これまでにお世話になった先生方とまたご一緒にお仕事をさせて頂けることにとても喜びを感じております。特に、本学臨床看護学講座教授の宮松直美先生には卒業論文以降、今日までご指導頂いております。自身の教育観、研究観の基盤を構築して頂いた宮松先生のもとで働けますことを大変嬉しく思っております。

私は、2−4年生を対象に成人看護学などの科目を担当しております。看護師は同じ看護ケアであっても、日々、思考・判断し行動することが求められます。そのため、教育においては、学生の専門的な知識の習得及び看護ケア能力の育成に加え、“科学的な根拠に基づく思考力・判断力”の育成に努めたいと考えております。

研究においては、修士課程で糖尿病・内分泌内科の先生方及び附属病院看護部の皆様のご協力により、糖尿病患者の喫煙行動についての研究を行いました。そして、この研究を通じて、エビデンスを構築することの重要さ、面白さを学びました。その後、博士課程では長野厚生連佐久総合病院人間ドック科をフィールドに、糖尿病の発症及び進展予防に関する回顧的コホート研究（佐久研究）を立ち上げ、実施してきました。この研究から、日本人の2型糖尿病の特徴を捉え、日本人の糖尿病の発症及び進展予防に効果的な保健指導や患者教育を考えていきたいと思っております。佐久総合病院のある佐久市臼田に通って3年ほどになりますが、比叡山と琵琶湖同様に浅間山と千曲川もとても好きで、そのような風景を眺めながらする仕事がlifeworkになればと思っております。

佐久総合病院の故若月俊一名誉総長の言葉に、「学問を討論のなかから」という言葉があります。私自身、どのような教員、研究者で在りたいか、ということを考えるとき、いつもこの言葉が頭に浮かびます。教員としても、研究者としてもまったくの未熟者でございますが、皆様より一層のご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

経歴

2005年 3月　滋賀医科大学医学部看護学科卒業
2007年 3月　滋賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）修了（看護学修士）
2007年 4月　滋賀医科大学医学部附属病院　看護師
2007年 4月　滋賀医科大学医学部臨床看護学講座 成人看護学領域　客員助教
2012年 4月　日本学術振興会　特別研究員
2013年 3月　大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻（博士課程）修了（保健学博士）
2013年 4月　滋賀医科大学医学部臨床看護学講座 成人看護学領域　講師

公衆衛生看護学講座

講　師　坂　東　春　美

2013年4月1日付で、本学医学部看護学科公衆衛生看護学講座に着任いたしました。

私は、1992年に公衆衛生活動に魅力を感じ保健師を志しました。その希望が叶い、1997年に大阪府大東市に保健師として採用され、地域住民の健康に関する支援活動と予防活動に携わってきました。保健師活動では、健康課題のひとつである喫煙率の高さに注目し、喫煙者の行動変容や受動喫煙の防止に関する支援と実態調査を精力的に行ってまいりました。この経過の中で、支援者の質の向上と健康課題に関する調査研究を深めるために、大学教員となることを決意し、社会人院生として大学院で学び、奈良県立医科大学に転職いたしました。

前任校では、保健師活動に直結する科目にとどまらず、保健師として施策化する能力を養う上で重要な、保健医療福祉行政論・保健統計学にも及んで学習支援を行ってまいりました。今後もこの様な、公衆衛生看護学に関する講義や実習を通して、将来保健師となる学生はもとより、臨床での看護を志向する学生諸子にも、公衆衛生看護学を深く学んで頂けるよう努めていく所存です。

また、研究に関しましては、喫煙行動と受動喫煙に関する研究を続けております。これは、地域住民の日頃の生活習慣が健康状態に大きく影響する様を目の当たりにすると共に、自らの力で改善しようとする人々の姿の両面から多くの刺激を受けたことにより、行動変容に興味を持ち、実際の支援と研究に取り組んでまいりました結果です。研究の中で、喫煙行動と経済的環境との関係が明らかになり、経済的支援体制の整備も重要ではないかと考えております。今後は、これまでの研究で得られた成果を基盤に、環境への働きかけも視野に入れた、ヘルスプロモーションに基づく研究へと展開してまいりたいと考えております。

現代における健康課題は、多岐にわたっております。今後も自らの研鑽はもとより、学生諸子と共に健康課題の改善に向けた方策を問い続け、また臨地で支援活動にあたる人々との交流を通じてより高い教育を目指したいと思っております。とりわけ、本学における臨地との交流を身近に持つ環境は大きな強みであると思います。この強みを積極的に活かして、教育ならびに研究を展開していきたいと考えております。

私は、教員としても研究者としてもまだまだ未熟者でございますが、皆様のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

経歴

1997年 3月　藍野学院短期大学　専攻科　地域看護学専攻　修了
1997年 4月　大阪府大東市役所　保健師（2007年3月まで）
2007年 3月　大阪教育大学大学院 教育学研究科（修士課程）
　　健康科学専攻　修了　修士（学術）
2007年 4月　奈良県立医科大学医学部看護学科
　　地域看護学　助教
2010年 4月　奈良県立医科大学医学部看護学科　地域看護学
　　（現　公衆衛生看護学）　講師　昇格
2013年 4月　滋賀医科大学医学部看護学科
　　公衆衛生看護学講座　講師
現　在　群馬大学大学院保健学研究科
　　保健学専攻博士後期課程　在学中

麻酔学講座

准教授　北　川　裕　利

2013年5月1日付けで、滋賀医科大学麻酔学講座准教授を拝命致しました。私自身は2002年より本学麻酔学講座にて勤務しておりますが、手術室内での勤務が多いため、あらためて自己紹介させていただきます。私は1991年に滋賀医科大学11期生として卒業し、初代教授天方義邦先生のもとで麻酔科医としての一歩を踏み出しました。1994年より市立長浜病院に赴任し、毎日麻酔業務に明け暮れた日々を過ごしました。この間に麻酔科長をはじめ、内科外科を問わず多くの素晴らしい先生に巡りあう事ができ、貴重な経験をさせていただきました。さらにペインクリニックや救急外来や集中治療診療にも携わることができ、今の私の麻酔科医としての臨床の礎を築いていただいたと感謝しております。

一方、研究面では国立循環器病センター研究所心臓生理部（山崎登自室長）において心臓の神経性調節についての基礎研究を行い、研究の大切さや面白さを教えていただきました。また幸運にもCOE特別研究員（同研究所循環動態機能部　砂川賢二部長：現九州大学）として研究に従事する機会にも恵まれました。大学に戻ってからは臨床が忙しくなりましたが、ラボを開いて研究を続けています。また、若い医局員と共に臨床研究や基礎研究を行い、研究の醍醐味や発見の喜びを共有しています。最近は細胞機能生理学講座と麻酔薬の心保護効果についての共同研究を行い、多くの成果が得られはじめています。

また、手術麻酔業務の現状についてお話させていただきます。本学の独立行政法人化に伴い手術件数が大幅に増えたことから、もともとの麻酔科医不足であったところにさらに不足するという状態が生じています。そのため手術の待ち時間が長くなり、多くの患者さんをはじめ関係各科の先生方にご迷惑をお掛けしています。現在、少しずつですが麻酔科医を確保できるようになり、勤務時間内における手術待ち時間は短縮できるようになってきています。今後は時間外手術や緊急手術にも迅速に対応できるよう、さらに麻酔科医を確保していきたいと思います。医局制度の崩壊とともに大学離れが続いていますが、大学でしかできないことも多くあると思います。そのような環境を整備することが仲間を増やす近道であると確信しています。そのためには各診療科の先生方やコメディカルの皆様の力をお借りしなければなりません。今まで以上に一層のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

経歴

1991年 3月　滋賀医科大学　医学部医学科卒業
1991年 6月　滋賀医科大学　医学部附属病院医員（麻酔科研修医）
1992年 9月　滋賀医科大学　医学部附属病院麻酔科助手
1994年 1月　市立長浜病院　麻酔科医員
1995年10月　COE特別研究員
　　（国立循環器病センター研究所循環動態機能部血行動態研究室）
1996年 3月　市立長浜病院　ICU・CCUセンター長
1998年 4月　市立長浜病院　麻酔科医長
2001年 4月　市立長浜病院　麻酔科部長
2002年 4月　滋賀医科大学　医学部附属病院麻酔科　助手
2006年 2月　滋賀医科大学　医学部附属病院麻酔科　講師（学内）
2011年 4月　滋賀医科大学　麻酔学講座　講師
2013年 5月　滋賀医科大学　麻酔学講座　准教授

公衆衛生看護学講座

講　師　輿　水　めぐみ

平成25年5月1日付で公衆衛生看護学講座に講師として着任いたしました。私は北陸地方の出身です。日本アルプスの山々と眼下に広がる田園風景から四季を感じ取りつつ育ちました。滋賀県は私にとって初めての土地になりますが、都市近郊にありながらも少し足を延ばせば郷里を彷彿とさせる豊かな自然もあり、どこか懐かしさと安堵感を覚えます。恵まれた環境の中で教育研究活動はもとより自然散策や史跡めぐりなど滋賀県を楽しむ時間も持てるように過していきたいと思っております。

さて、私の看護の歩みは郷里の自治体の保健師となったことに始まります。保健師活動は、配属先が自治体病院であったことから病棟や救命センターなどの看護師業務を担いながらの活動でした。主に担当したのは、糖尿病の方への保健指導や患者会支援、在宅酸素や腹膜透析など退院後の継続看護が必要な方への在宅療養支援、地域住民の医療保健福祉に関する相談業務でした。自分自身の力不足を実感する日々でしたが、当時のことを振り返り、看護とは何か、支援とは何かといった、対象者やスタッフの皆様から頂いた沢山の問いかけやメッセージを教育研究活動に還元していくことが私の使命と捉えております。

看護職者としてどうあるべきかを模索する中、患者会の活動で糖尿病の子どもの就学や学校生活の課題を知り、自分自身が学校保健に関する知識や技術を得る必要があると感じたことを契機に進学をしました。二度目の学生生活は、地域で暮らす子どもの生活実態や子どもを取り巻く支援の現状を理解するべく、福祉事務所、児童相談所、学校、夜間急病診療所など、子どもに関連した医療保健福祉の分野に看護職や養護教諭として勤務する機会を頂き、研究室と勤務先を行き来しながら過しました。様々な背景を持つ子どもや保護者、その支援に熱心に取り組んでいらっしゃる専門家の方々と出会い、子どもを守り育てるのは地域社会全体の責任であることを強く実感する日々でした。この進学がきっかけとなり教育研究職に就く機会を与えていただき現在に至ります。

私の主な担当科目は在宅看護分野です。研究では、地域に暮らす病気や障がいのある方々の生活に少しでも貢献できることを目標に微力ながらも精一杯取り組んでいきたいと思っております。また、看護学生の職業人としての成長発達も研究テーマとしており、研究成果を教育活動に結びつけていきたいと考えております。教育職としても研究職としてもまだまだ未熟ですが、皆様からのご指導ご鞭撻を賜り、少しでもお役に立てるよう努力して参ります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

経歴

1997年 3月　富山医科薬科大学（現 富山大学）医学部看護学科　卒業
1997年 4月　富山県黒部市　保健師
2003年 1月　石川県の保健医療福祉機関、学校に勤務
（在学中の職歴：～2005年3月）
2003年 3月　金沢大学教育学部養護教諭特別別科　修了
2005年 3月　金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程　修了
2005年 4月　愛知県立看護大学（現 愛知県立大学）　助手
2007年 4月　愛知県立看護大学（現 愛知県立大学）　助教
2009年 4月　日本赤十字豊田看護大学　講師
2013年 4月　名古屋大学大学院教育発達科学研究科
心理発達科学専攻博士後期課程（休学中）
2013年 5月　滋賀医科大学医学部看護学科公衆衛生看護学講座　講師

キャンパスライフ

第38回　浜松医科大学との交流会

去る5月10日・11日の2日間、本学において第38回浜松医科大学との交流会が行われました。

体育館での開会式には、本学の馬場学長、服部副学長他教職員と浜松医科大学の中村学長、小出理事他教職員の列席の下、あわせて600余名が参加しました。また、期間中、総計で800名を超える両校学生の参加がありました。

交流会はあいにくの天候となりましたが、グラウンド、体育館、武道場等では熱戦が繰り広げられ、クリエイティブモチベーションセンターでは両校の管弦楽団による合同合奏が行われました。グラウンドでの準硬式野球の対抗戦では、最初に浜松医科大学の小出理事による始球式が執り行われました。

2日間の各クラブの対戦成績は8勝5敗1分で本学の総合優勝となり、優勝杯を勝ち取ることができました。

平成25年度　第38回
浜松医科大学・滋賀医科大学交流会　競技結果

平成25年5月10日（金）～11日（土）

種目		滋賀		浜松
硬式庭球	男	○	3 － 1	×
	女	×	0 － 3	○
剣道		△	1 － 1	△
準硬式野球		○	8 － 5	×
バスケットボール	男	×	62 － 72	○
	女	○	71 － 30	×
バレーボール	男	×	0 － 2	○
	女	○	2 － 0	×
バトミントン	男	○	4 － 1	×
	女	×	0 － 5	○

種目	滋賀		浜松
ヨット	○		×
ボート	×		○
ハンドボール	○	26 － 16	×
空手道	試合不実施		
ゴルフ	○		×
総合結果 滋賀医科大学 8 対 5 浜松医科大学　1引き分け			

※通算（滋賀医科大学）　19勝14敗 5引き分け

浜松医科大学との交流会に参加して

委員長　医学科第4学年　植　村　裕　樹

まず始めに、交流会を開催するに当たりご尽力いただきました先生方、職員の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今年で38回目を迎えるこの交流会ですが、浜松医科大学の学生が本学の学生に呼びかけて始まった、という経緯があります。学校全体での行事でありながらも、あくまで学生主体で開催されるこの交流会に委員長として携わらせていただき、大変名誉なことと思います。「自分に出来るのか」という不安がありましたが、何とか無事に終わることができ、ほっとしています。

今年は本学での開催ということで、学生側の取りまとめをさせていただきました。どこで何が行われるのか、どのくらいの人数が参加するのか、レセプションの食事の量はどれくらいがいいのかなど、全員に満足してもらうためにどうすればいいのか考えるのが大変でしたが、当日には大きな問題もなく、皆が楽しんでいる様子を見て安心したのを覚えています。さまざまな準備に始まり当日に至るまで多くの方に協力をお願いしたのですが、皆快く手助けしてくれたことはとても頼もしくそして嬉しく思いました。私一人だけでは到底出来るものではありませんでした。

私は今回の交流会委員を通じて、学生同士が協力すればこのような大きな行事も実行できるのだということを学びました。これは、私達の学生生活にもいえることだと思います。将来に向けて一人一人が自主的にそして協力して行動するということで大きな成果を生むことが出来るのではないでしょうか。

2日間大きな事故もなく、無事交流会を終えることができ、ご協力くださった皆様に改めて御礼申し上げます。また後輩たちには来年以降も素晴らしい交流会が開催できるように頑張ってもらいたいと思います。

バレーボール部主将　医学科第4学年　村　本　圭　史

まず、今回の交流会を開催するに当たり、ご尽力いただきました先生方、職員の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回は、滋賀医科大学の主催であり、レセプション会場の設営やスピーチなどの仕事を承り、多くの人を動かす良い経験をさせていただくことができました。会場の設営では一体何人の人が会場に入りきるのか、どのようなテーブル配置で行うのが安全なのかといろいろ頭を悩ませました。また、スピーチでは大勢の人の前で堂々と物事を伝えることの難しさを改めて実感することとなりました。しかし、それらも実行委員長の植村くんをはじめとした体育会の仲間たちの協力のおかげで無事成功させることができました。今年で交流戦も38回目を迎えることとなりましたが、その長い歴史の中の一回の運営に携わることができたことを大変光栄に思います。

昨年、滋賀医科大学は総合優勝を果たすことができなかったので、その雪辱を果たすことを目標に今回の交流戦に臨みました。競技は二日間あいにくの天気の中おこなうこととなりましたが、各部活日々の練習の成果をその日に全力でぶつけ、結果滋賀医科大学は総合優勝を勝ち取ることができました。競技が終わった時に、普段から行っているスポーツや技術を通して滋賀と浜松のように遠く離れている仲間と繋がっていることを実感し、とても幸せな気持ちなりました。

2日間、大きな事故や怪我もなく無事に過ごせたので本当に良かったと思います。後輩たちにはこの長く貴重な歴史を絶やすことのないようにこれからもこの交流会を続けていってほしいと思います。

平成25年度　新入生研修

4月5日・6日の両日、平成25年度新入生宿泊研修が、医学科・看護学科の新入生及び引率教職員総勢190名の参加により休暇村近江八幡等にて行われました。

初日は透き通るような快晴の下、大自然の中での飯盒炊爨に始まり、午後からは、「里親学生支援について」「喫煙と違法薬物」「学生のリスクマネジメントについて」「保健管理センターについて」の講演やクラス別懇談会を実施、2日目は、「滋賀と滋賀医大の魅力」「人権学習」の講演後、陶芸体験を実施しました。2日間を共に過ごした新入生はお互いに親交を深め、大学生活のスタートを切りました。

新入生研修に参加して

医学科第1学年　澤　村　みずき

入学してすぐの研修旅行。楽しみであった反面、全く知り合いのいない中で二日間うまくやっていけるのだろうかという不安も多くあるなか滋賀医科大学を出発し休暇村近江八幡に向かいました。しかしバスに乗りこんで、隣や前後の人と仲良く話すにつれ、その不安はすぐになくなりました。そこからの合宿は本当に楽しいものでした。着いてからすぐの飯盒炊爨。自分たちで火から起こして作ったカレーは格別でしたし、一緒に協力して作るというなかで、医学科の人はもちろん、授業などではあまり関わることのない看護学科の人とも友達になることができました。

講義は医学に関係あることから滋賀県についてなど、様々なことが、学べました。特に大阪出身の私にとって滋賀県についての講義はとても興味深いものでした。また医学関連や人権の講義などは将来本当に医師になれるということを再認識する良い機会となりまたいい勉強になりました。その後のクラスごとの自己紹介では司会進行をしてくださった先生がとても面白い方だったこともあり、とても盛り上がりました。また今まで全く知らなかったクラスの人達のことも多く知ることができ良かったです。就寝時間までの夜の自由時間には女子の医学科全員で一部屋に集まり自己紹介をしました。そこから本当にクラス関係なく全員との交流が増えたように思います。

二日目の陶芸も作るのは難しかったですがとてもいい経験になりました。まだ作品が届いていないので焼きあがりがどのようになっているか楽しみです。悪天候のせいで、少し早い解散になってしまいましたが、この研修旅行のおかげで私は多くの同級生と仲良くなることができ、また医師になれるということを深く自覚することができました。この合宿の経験をスタートとしてこれからも充実した大学生活を送り、成長していけたらいいなと思います。

新入生研修に参加して

医学科第1学年　**高　石　亮　太**

入学式からわずか2日後、まだ言葉を交わしたことがない人がほとんどという中行われた研修旅行の始まりは、ただただ不安と緊張ばかりでした。しかし研修を終えた今、この2日間を振り返ってみると、たくさんの笑いや喜びが思い起こされ、とても内容の濃い、充実した時間を過ごせたことを実感します。

初日は天候にも恵まれ、休暇村近江八幡ののどかな景色と、爽やかな湖の風の吹く中、飯盒炊爨が行われました。火おこしの煙と悪戦苦闘しながら、医学科のメンバーだけでなく看護学科の方たちとも協力しあってカレーをつくり、その中で緊張感は徐々に解けてゆき、これから同じ学び舎で共に学ぶ仲間との連帯感を、入学して間もないこの時期に実感できたことは、とても意義深いことであったと思います。

そして、最も印象的であったのが、クラス別懇談会での自己紹介です。一人一人がそれぞれユニークな個性を持ち、皆が明るく笑顔で、滋賀医科大学での6年間を素晴らしい仲間とともに過ごせることに、心強さと、そして喜びを感じました。

懇談会から就寝までの自由時間では、多くの仲間と交流を深められ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

また、二日間を通して行われた先生方の講義では、滋賀医科大学の学生として、医師を志す者として、忘れてはならないこと、心がけるべきことを数多くご教示いただき、これからの6年間の道のりを前にして、気持ちを新たにし、滋賀医大生であることの強い自覚を身に着けると同時に、仲間とともに切磋琢磨し、立派な医師になる覚悟を強くすることができました。

看護学科第1学年　**上　野　友　大**

私は入学後の研修旅行を知った時、不安で頭がいっぱいでした。人見知りの私は、話したこともない人と友達になれるのかと前日まで気が気でなりませんでした。

当日、近江八幡休暇村に着き、バスを降りてすぐに飯盒ごとのグループに別れ、カレー作りが始まりました。男女混合ということもあり、初めは緊張しましたが、すぐに打ち解け、抱いていた不安も知らぬ間になくなりました。

食後はホールに集まり沢山の講義を受けました。その中でも、喫煙と違法薬物についての講義が特に私の心に残りました。たった一度の過ちで人生全てを失わないように、自分の意思を強く持つことの大切さを深く心に刻みつけました。

また懇談会では看護学科の人全員と自己紹介をして、お互いに面識を持つことが出来ました。その後、部屋で同じになった医学科の人達とも、仲を深められ楽しい時間を過ごせたことはとてもよかったと思います。

翌日は、滋賀と滋賀医大の魅力などについて学びました。私は滋賀県出身なのですが、滋賀の魅力の講義を聞き、自分があまり滋賀の良さを知らなかったことに驚きました。また自分達が滋賀県民から医学的に多大な期待を懸けられているとも知り、大学生活中に堕落することなく気を引き締めて勉学に励もうと思いました。

最後に、陶芸の里で水茎焼きに挑戦しました。悪天候のため時間は少なかったのですが、皆和気あいあいと思い思いのものを作り、さらに良い思い出を作ることができました。

今回の研修旅行では、医学科看護学科に関わらず多くの同級生と交流を深めることができ、また自分が本当に滋賀医大生なのだと改めて実感出来ました。

新入生研修に参加して

看護学科第1学年　**北　村　奈津紀**

新しいスーツに身を包み、緊張した面持ちで臨んだ入学式が終わってまだ少ししか経たないうちに催された、突然の合宿。周りの人の顔と名前も全く一致していない状態での新入生研修合宿に、私は動揺を抑えきれませんでした。行先がどのような施設なのかも知らず、同じバスの人に知り合いはおらず、頭の中は混沌としていました。

近江八幡の休暇村に到着するとほぼ同時に始まった飯盒炊爨は、煙で咳き込み、煤で目と鼻が痛くなり、服も汚れ、冷たい水で手がかじかんでしまうという過酷なものでしたが、最後には美味しいカレーが出来上がり、さらにそのあとは班で自己紹介をし、医学科と看護学科の隔たりなく知り合いになることができました。

いくつかの講演を聞いたあと、クラス別の懇談会が開かれ、看護学科で自己紹介をする機会が設けられました。ようやくたくさんの人の名前と顔、趣味や出身地などを知ることができ、安堵するとともに、これから4年間このメンバーと共に勉強していくのだということを再認識しました。とはいえ、皆優しく面白い性格の人なので、これからの関わり合いがとても楽しみです。

翌日は陶芸の里で水茎焼の陶器を作りました。その際もテーブル席だったため、新しい友人との交流ができ、非常に良いひと時を過ごすことができました。

帰宅した私は、合宿前の不安が嘘のように明るい面持ちをしていました。このように、一緒にいて幸せな気持ちでいられる仲間に出会えたことの喜びを常に感じながら、4年間の大学生活を、勉学、部活動、私生活共に有意義なものとして過ごすことのできるよう励みたいと思います。

看護学科第3年次編入生　**宮　本　加奈子**

滋賀医大恒例だという、入学直後の研修旅行に行ってきました。旅行が始まるまでは、知らない人同士の環境の中で班を組んだり部屋を共有したりする不安と同時に、編入生という立場でどのように交流していけばいいのかという戸惑いがとても大きかったことを覚えています。そんな中編入生同士でしか話したことのないまま研修旅行を迎えました。

バスが休暇村に着くなり飯盒炊爨の班にわかれてカレーを作ります。共同で作業をし、一緒にご飯を食べて、一緒に講義を受け同じ部屋で生活するうちに、少しずつ自分の中にあった「編入生」というしこりがとれていくのを感じました。懇談会で自己紹介をしたことで初めて看護学科全員と顔を合わすことができ、お互い話をするきっかけとなりました。

二日間の講義では、これから大学生としてまた大人として生活していく中で、陥りやすい危険や対策について学びました。特に薬物についてはその実際を視覚的にも学ぶことができ、これまでの知識をより深めることができました。滋賀の魅力についての講義は、滋賀県出身でない私にとってどれも新鮮でとても興味深く聞くことができました。最後には水茎焼きを作り、今回の思い出を形にできたのではないかと思います。今回の研修を経たことで、学科や学年を超え新入生同士の距離が縮まったことは明らかです。これからも多くの人と交流し、様々な仲間と楽しみながら切磋琢磨していきたいと思います。

リーダース研修

本学では課外活動を有意義に発展させ、リーダーとしての自覚と認識を高めると共に、課外活動団体の相互理解を深めることを目的として、毎年、リーダース研修を開催しています。

平成24年度は去る3月6日（水）、体育会系・文化会系の各課外活動団体の代表者（キャプテン）32名の参加の下、クリエイティブモチベーションセンターにおいて、生命科学講座・小森教授をはじめ計6名の教員が参加し実施されました。

当日は学生生活支援部門員の相見解剖学講座准教授の開講挨拶にはじまり、本学第2期生の江口豊救急集中治療医学講座教授による急性アルコール中毒やAEDの使用についての講演、また班別懇談会ではクラブの運営や問題点等、学生自ら提案したテーマについて班ごとに話し合うなど充実した内容の半日となりました。

リーダース研修に参加して

文化会会長　兼　水泳部主将　医学科第4学年　**山　本　大　雅**

今年も毎年同様にリーダース研修が体育会・文化会の部活動代表者によって行われました。班別での討論、江口教授による救急蘇生講習、そして研修後の附属病院展望レストランでの交流会など、非常に内容の濃い一日になりました。

班別の討論では、各部活動の代表者として日頃から抱いている疑問、問題を、同じように部活動をまとめる立場にある人と共有しあい、その解決策を探すことで、よりよいリーダーになるにはどうすればよいのかを考えました。今年は多くの代表者が部員の間の意識の差に悩んでおり、医学部の部活動という特殊な状況下で、どのような部活動への取り組み方が求められるのか、について熱く議論が交わされました。その結果、部員それぞれがなんのために部活動をしているのかしっかりと考えること、ということがひとつの結論としてあがりました。普段ではなかなかない、他の部の代表者との議論の場であったので、これからリーダーとして行動するうえで非常に有意義なものになったと思います。

救急蘇生講習では江口教授から直々に救急蘇生について指導していただきました。ケガや飲酒などのトラブルを回避、対処するためにどのようなことをすべきなのかということをはじめ、AEDを用いた心肺蘇生法などを教えていただきました。部活動の責任者として、部員にもしものことがあった場合どう行動すべきなのか、ということについての講義であったので、皆熱心に講義を聞いていました。

今回のリーダース研修は短い時間でしたが、部活動代表者それぞれの意識が高まり、部活動の発展につなげられる非常に実りのある研修になったと感じています。この経験をいかすことでリーダーとしてさらなる成長が得られれば、と思います。この研修に協力してくださった先生方、関係者の皆様に文化会会長、体育会主将として御礼を申し上げます。

医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

第107回医師、第99回保健師、第96回助産師、第102回看護師の各国家試験の合格発表が平成25年3月に行われ、滋賀医科大学の合格状況は次のとおりでした。保健師、助産師の新卒者の合格率は、100％でした。なお、いずれの合格率も全国平均を大きく上回る結果となりました。

第107回　医師国家試験　平成25年2月9日（土）・10日（日）・11日（月）実施

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	109名	108名	101名	93.5%	全国　受験者　8,569名
既卒者		4名	3名	75.0%	合格者　7,696名
計		112名	104名	92.9%	合格率　89.8%

参考　前回　第106回医師国家試験の結果

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	87名	85名	83名	97.6%	全国　受験者　8,521名
既卒者		1名	0名	0.0%	合格者　7,688名
計		86名	83名	96.5%	合格率　90.2%

第99回　保健師国家試験　平成25年2月15日（金）実施

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	65名	65名	65名	100.0%	合格率（全国）96.0%
既卒者		2名	1名	50.0%	
計		67名	66名	98.5%	

参考　前回　第98回　保健師国家試験

	卒業者	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	72名	69名	68名	98.6%	合格率（全国）86.0%
既卒者		1名	0名	0.0%	
計		70名	68名	97.1%	

第96回　助産師国家試験　平成25年2月14日（木）実施

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	8名	8名	100.0%	合格率（全国）98.1%
既卒者	0名	0名	—	
計	8名	8名	100.0%	

参考　前回　第95回　助産師国家試験

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	8名	8名	100.0%	合格率（全国）95.0%
既卒者	0名	0名	—	
計	8名	8名	100.0%	

第102回　看護師国家試験　平成25年2月17日（日）実施

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	55名	52名	94.5%	合格率（全国）88.8%
既卒者	1名	0名	0.0%	
計	56名	52名	92.9%	

（注）新卒者中10名は3年次編入学者で、既に合格済み。

参考　前回　第101回　看護師国家試験

	受験者	合格者	合格率	備考
新卒者	61名	61名	100.0%	合格率（全国）90.1%
既卒者	0名	0名	—	
計	61名	61名	100.0%	

新入生歓迎企画

私がすすめるこの本2013

新入生、新規採用職員の皆さん、滋賀医大へようこそ！
図書館では、良き医療人を目指し、これから本学で学ばれる皆さんのために、
7名の先生方から図書を推薦いただき展示する企画を開催しました。
（2013年4月3日～5月24日）
展示図書は、すべて図書館で所蔵しています。在学生の方もぜひご覧ください。

図書館長
マルチメディアセンター長
松末吉隆 教授
整形外科学

●道ありき：青春編（ 浦綾子 著　新潮社）
小学校教師だった著者が、結核を患い、およそ13年間のほぼ寝たきりの生活の中で、信仰との出会いや、愛する人との出会いを経て、成長していく様を赤裸々に綴った自伝。
読み終わった後は、おそらく多くの人が著者の圧倒的な生き様に心を打たれ、改めて自らの生き方を振り返ってしまうに違いない。

●わたしを離さないで（カズオ・イシグロ 著　早川書房）
どこか不思議な同じ寄宿学校で育った幼なじみの3人の記憶からはじまる、友情、そして恋と愛の物語。
しかしそれを描くと同時に生と死、それにまつわる倫理といった問題もモチ　フとして組み込まれており、物語が進むにつれて謎にみちた世界がどんどん明らかになり、読み終わったあとは深く考えさせられる。
詳しくは読んでみてください。

●生きようよ：死んじゃいけない人だから（細谷亮太 著　岩崎書店）
聖路加病院副院長・小児科部長の著者は、小児ガンの権威であるが、「生と死」を見つめながら小児ガンの子供達を家族の一員のように真摯に治療を行っている。彼の人生の歩みを通して、「生きる」こと「死ぬ」こと、日本の美しい四季、そして戦争と平和などについて若い人に伝えたいことをエッセイ風にまとめてある本で、医療者を目指す人には是非読んで貰いたい。

室寺義仁 教授
哲学

●世界から猫が消えたなら（川村元気 著　マガジンハウス）
一度きりの人生だから、やり直しはできます。でも、寿命という命の時間は、取り戻しはできません。一日の余命と引き換えに、「アタシ、悪魔っす！」と名乗る派手で陽気な悪魔と取引するとするならば、あなたのそばで大切な何が消えて行くことを夢想しますか。チョコレート？ 携帯電話？ 二人で通った映画館？ それから…。

●宵山万華鏡（森見登美彦 著　集英社）
祭の夏祭り、祇園祭の「宵山」をモティーフとしたファンタジー。心の奥の「ひだ」が共鳴してしまいます。声を出して笑えもします。赤い浴衣姿の、皆瓜二つの顔をした、飛び去って行く女の子たち…、「宵山様」と「みんなで一人、一人でみんな」。森見作品、『夜は短し歩けよ乙女』、『四畳半神話大系』などなどは、大学生の時代にこそ味わって下さい。

●夜と霧（ヴィクトール・E・フランクル 著　みすず書房）
Viktor Emil Frankl（1905-1997年）は、オーストリアのウィーンに生まれたユダヤ人の精神科医、心理学者で、フロイト、アドラーに学びました。1941年12月にヒットラーによって出された特別命令「夜と霧」作戦によって、家族と共に強制収容所のテレージエンシュタットに収容されます。父親はここで、また、母親と妻も別の収容所に移され死亡します。フランクルは1944年10月にアウシュビッツに送られますが、3日後にテュルクハイムに移送され、1945年4月にアメリカ軍により解放されることになります。このような強制収容所での体験をもとに著された『夜と霧』は、世界的なロングセラーとして60年以上に渡って読み継がれています。

杉原洋行 教授
分子診断病理学

●背教者ユリアヌス（辻　邦生 著　中央公論社）
私の毎日は、長編小説の読める状況ではない。若いころに読んでおいてよかったと思う長編のひとつがこの本。人が生きている間は、まだ人生の途上。生まれてから死ぬまでのト　タルな人の　生は作品で味わうしかない。そのようなト　タルな　生との出会いは、しばしば生きた人との出会いよりも現実味がある。しかも、何度でも出会える。これが長編小説の魅力だと思う。学生の頃、私の読書タイムは電車での往復1時間の通学時間だった。結構読めるものである。学生の間に、ぜひ多くの長編小説と出会っておくことを薦めたい。そして、気に入った本は何度も読めば、旧友のように思えてくる。その友が、ピンチに直面した時に味方になってくれる。

●滋賀県の山（山本武人　竹内康之　青木繁 著　山と渓谷社）
多忙な毎日の中で、気持ちのバランスを保つのに山歩きが役立っている。山を歩く時に常に携帯しているのがこの本だが、次に登る山をどこにするかを考える時の方がよく読んでいるだろう。滋賀県は歴史と出会える山が多く、恵まれていると思う。また琵琶湖のおかげで空が広く、山も明るい。この本は情報が新しく、近場にも良い山がたくさんあることを教えてくれる。

畑野相子 教授
老年看護学

●はだしのゲン（中沢啓治 著　中央公論社）
物語は、広島に住む主人公・中岡元（以下ゲン）が原爆で、父、母、姉、弟を亡くしますが、たくましく生きていく姿を描きます。これは、自伝的な作品で、作中のエピソ　ドも著者が体験されたことです。時事通信社の読んでおきたい日本史モノマンガランキングの1位に選ばれたこともある作品です。本当に、読み応えのあるものですので、ぜひ読んでいただきたいです。
下駄の絵付け職人であったゲンの父は、反戦思想の持ち主であったため、町内会長や近所から嫌がらせを受け、「非国民」とののしられます。子どもたちは「非国民」という冷たい視線をはねかえすため海軍にはいるなどしますが…。
1945年、原爆投下時、父、姉、弟は家の下敷きになり、そのまま家に火が付き生きたまま焼け死にます。ゲンも被爆しながらも、その後の生活は筆舌に尽くしがたいです。ぜひ作品に触れてください。
我が国は、原爆が投下された唯一の被爆国です。これがどんな悲惨なことか、この過ちを二度と繰り返さないために、悲惨さを感じてほしいと思います。そして、この本が、平和について考えるきっかけになれば幸いです。

●言葉で治療する（鎌田　實 著　朝日新聞出版）
鎌田實氏は、長野県にある諏訪中央病院の医師で、住民と一緒に地域医療に尽力されている人です。現在は諏訪中央病院の名誉院長をしながら、チェルノブイリの問題に取り組んでおられます。著書は、沢山ありますが、今回は『言葉で治療する』を推薦します。内容は以下の通りです。
病にかかったとき、患者さんと家族は医療者の言葉しだいで、治療の日々が天国にも地獄にもなります。「病気になったのは頑固だからだ」「苦しくて、病院には殺されるために来たようなものだ」「弱っちゃったね、また元気になろうね。痛みもきちんと止めてあげますよ」……などの衝撃の現場を紹介しながら、医師の言葉しだいで、患者さんの心と体が立ち直っていく様子を示しています。いわば、新しいコミュニケ　ション術と言ってもいいでしょう。
医師、看護師にとってコミュニケ　ションスキルは、不可欠です。必ず参考になると思います。余力のある人は、『がんばらない』集英社『あきらめない』集英社などもお奨めです。

村上義孝 准教授

医療統計学

●感染地図：歴史を変えた未知の病原体（スティーヴン・ジョンソン 著　河出書房新社）

本のオビ「150年前のロンドンを見えない敵が襲った！大疫病禍の感染源究明に挑む『壮大な実験』と『壮絶な闘い』はやがて独創的な『地図』に結実していく。」のようにワクワクする本です。ちなみに今年は主人公ジョンスノーの生誕200年にあたります。

●ローマ人の物語（塩野七生 著　新潮社）

歴史は人間が織りなす壮大なドラマであり、世の中にはいろんな人がいる（いた）ことを教えてくれる本です。なお、とても長いので全部読もうとせずに、気になるところから読むことをお勧めします。

●人生論ノート（三木　清 著　新潮社）

せっかく大学に入ったのですから教養として哲学はどうでしょう？ とはいえ、なかなか敷居が高いので、読みやすい本から始めるのをお勧めします。人生に悩むとき哲学は役に立ちますし、読書はみなさんの視野を広げてくれます。

●成りあがり：矢沢永吉激論集：how to be big（矢沢永吉 著　角川書店）

本をまったく読んだことのない人にはこれをお勧めします。今でも読むと元気をもらいます。なぜかって？ その答えは本の中にあります。そういう本です。

瀧川　薫 教授

精神看護学

●夜と霧（ヴィクト　ル　E　フランクル 著　みすず書房）

ナチス　ドイツの強制収容所に囚われた自らの体験をつづり、限界状況における人間の尊厳の姿を余すところなく描いた傑作中の傑作。

著者フランクル自身が1977年に大幅な改訂をほどこしたため、その改訂版に基づき2002年に池田香代子訳による『夜と霧』新版が出版された。

●自由からの逃走（エ　リッヒ　フロム 著　東京創元社）

現代における「自由」の問題は、機械主義社会や全体主義の圧力により個人の自由が脅かされるというだけでなく、人々がそこから逃れたくなる呪縛となりうる点にあるという斬新な観点で「自由」について解明した、必読の名著。

●医療と専門家支配（エリオット　フリ　ドソン 著　恒星社厚生閣）

医学や看護の領域で「専門（性）」という言葉は肯定的に使われる。しかし、著者は専門家や専門職者によるクライエントの統御　支配について解説し、その力の源泉を従来のように知識や技能の優越に求めないところが秀逸である。医療という場における、クライエントとの関係における位置の確保や仕事の独占により支配が可能になり、存続すると指摘し、別の関係のあり方を提案する。医療社会学の古典的名著。

●ブラックジャックによろしく（佐藤秀峰 著　講談社）

2002年に第6回文化庁メディア芸術祭漫画部門優秀賞を受賞した作品。医療現場の現状や大学病院の実情を研修医の視点で描いた、日本を代表する医療をテ　マにした漫画の傑作。

この作品を読んで泣かないような医療人には育って欲しくない。マンガで読む価値のある数少ない作品のひとつ。

岡部英俊 教授

臨床検査医学／検査部

●形而上学（アリストテレス 著　岩波書店）

●動物誌（アリストテレス 著　岩波書店）

●動物哲学（ラマルク 著　岩波書店）

西欧の科学的発想の基盤にはギリシャ哲学に端を発するもの多く、アリストテレスの弁証法的発想法もその　つである。上記の三編は、西欧哲学の根源の　端をなす弁証法とそれに基く科学的な思考法を動物学の分野で系統的に学ぶ上で多いに参考になった私の学生時代に読んだ本で、　連のものとして　読するに値する。形而上学の著者のアリストテレスは、古代ギリシャ哲学者で、この本の中で感覚を通して具体的に把握できる物事　現象を手がかりにしてこの発想法の活用により、その背景に潜む原理を解明することが出来ることを形而上学と称し、その実践を好むことをPhilosophyと称しその有力な手段として弁証法を生み出した。

形而上学に記載されている彼の弁証法的思考法はトマス･アクイナスにより中世のスコラ哲学にも組みこまれた。そのため教会を基盤として発足した欧州の伝統的な大学の多くは、アリストテレスの考え方に則った形而上学を追求する場として設立され、原理追及のために扱う具体的な題材毎にグル　プが分れたものが、大学における学部形成の元となった。このような西欧の伝統的な大学では博士号はその設立の理念に従い、学部の如何を問わず、感覚を通して把握できる事項をもとになんらかの原理を追求したという意味をこめ現在でもDr of philosophy（PhD）と称される。アリストテレスは、幅広く科学的な分野でも形而上学の　環として自ら提唱した弁証法に基づき論理の追求を実践した。

そのうち、動物誌は動物の外形や解剖学的な内部構造および生殖を含めた生態などの類似性と相違を総合的に比較分析して弁証法的思考法により分類を試みた秀作で、仔細に読めば、後世に動物の分類を通して進化論を提唱したラマルクの動物哲学で進化論の発想に用いられた弁証法的発想法と相通ずる動物分類の考え方が読み取れる。

日本では、進化論の創始者として、ダ　ウィンが有名であるが、ラマルクは、ダ　ウィンに先立つこと50年前に、この書を著した進化論の先駆者である。この本では、動物の進化を神経の発達と結び付けて論理的に考察している点に特色がある。なお、残念なことに本書のタイトルの由来となった後半の第二部はかなり難解なため邦訳されていないが、私が英訳本で読んだ範囲では、動物の体が当時その存在が知られ始めたばかりの細胞から構成されていることに言及し、生化学の発展が乏しい時代にもかかわらず臓器の機能の違いは各臓器を構成する細胞におけるダイナミックな物質の代謝の違いがあると推定し、その考えをベ　スにして進化の根本的な原理を追及しようとする探求心に満ち溢れた記載があり、現代の生物学の観点からすると間違いも多いが、その熱意は敬服に値する。今回推薦した3篇を読めば、西欧の伝統的な大学の設立時から脈打つ伝統的な弁証法的発想法が動物学へ応用され展開し進化論にまで到達した系譜が理解でき、西欧的な発想法の歴史的背景の　端を理解する上で有用と思われる。

ご協力いただいた先生方、
ありがとうございました！

「滋賀病院」から「東近江総合医療センター」へ

滋賀医科大学総合外科学講座　教授
来　見　良　誠
（国立病院機構東近江総合医療センター　副院長）

国立病院機構滋賀病院は、平成25年4月1日より国立病院機構東近江総合医療センターと名称変更いたしました。5月1日からは7階建ての新病棟をオープンいたしました。病床数は、南3階から南7階までは各階55床とし、東2階の60床を含めて320床に増床されました。名神高速道路上り線の八日市インターチェンジまでの距離が2km付近のところから真正面にみえる7階建てのビルが新病棟です。周辺に高い建物がないため、小高い丘の上に建っているような印象を受けます。外来棟・管理棟・旧検査棟は、当分の間は、従来の施設を改装して使用するため、病院の正門から見た新病棟は意外に小さく見えています。正面玄関を入って外来棟を通り抜け新病棟に入った瞬間に、昭和から平成に瞬間移動したような感覚になる人が多いようです。

平成25年4月20日、滋賀県・東近江市・滋賀医科大学・国立病院機構・医師会等の関係者を含め200名を超える参加者による新病棟完成の記念式典を、新病棟2階の多目的ホール「きらめきホール」において開催いたしました。それに引き続いて地域住民の方々もあわせ、内覧会を開催いたしました。また、5月16日には、地域連携の一環として「三方よし研究会」を、全フロアーを使用して開催いたしました。6月5日には、滋賀県5大がん地域連携パス院内研修会を「きらめきホール（西）」で開催いたしました。「きらめきホール」は、分割使用ができるようになっており、それぞれ100名の収容が可能で、同時にふたつの会議が開催できるような遮音機能を有する隔壁を設置しています。

新病棟1階は、放射線部門と内視鏡センターとなっています。1階の天井は他の階より約30cm高く設計しています。2階は手術部門で、材料部と手術室を備えています。手術室は5室（クラス100：1室、クラス1000：1室、クラス10000：3室）あり、整形外科や心臓血管外科の手術も可能な環境になっています。この階の天井は、他の階より約60cm高くなっています。入口のホールにはリカバリー用ベッドを2床設置できるようになっています。入退室管理は暗証番号で行っており、監視カメラを設置し、厳重な管理体制をとっています。3階から7階は入院病棟となっています。

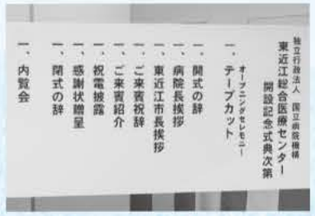
新病棟は色彩にも配慮しています。各フロアー毎に淡色系の基調色を設定しています。3階は婦人科・眼科病棟・歯科口腔外科（淡ピンク色）、4階は小児科・整形外科病棟（赤色・小児壁画）、5階は内科・循環器内科（緑色）、6階は消化器内科・消化器外科（オレンジ色）、7階は呼吸器内科・呼吸器外科（青色）となっており、ナースステーションおよびその床面とエレベーターの表示には基調色を用いています。また、東近江総合医療センターへの改称に伴い、ロゴマークも変更いたしました。「琵琶湖」・「東近江医療圏」・「三方よし」・「東近江市の花」をもとに基調色をブルーとして図案化したものです。

外来診察は、従来の施設を改修し使用する予定です。6月末から順次改修を開始し、約6か月後に、外来診察室・検査室・救急診察室・当直室・医局など全ての改修が終了する予定になっています。また、病院に隣接して東近江市休日診療所が現在建設されています。今年度中には、すべての外来施設・研修施設が完成し、東近江市の中核病院としての東近江総合医療センターが機能することになっています。

平成22年から地域医療再生計画が実行され、総合内科学講座・総合外科学講座の設置に始まり、医師派遣の安定化、研修医教育・医学部学生実習の充実などの実績を積み上げて新病棟の完成に時期に合わせて、「国立病院機構滋賀病院」から「国立病院機構東近江総合医療センター」に改称いたしました。今後さらに充実した医療が展開できるよう尽力いたしますので、ご協力よろしくお願いいたします。

記念式典

学長挨拶



式次第

ロゴマーク

センター外観

名神高速道路から
センターを臨む

センター7階から
八日市IC方向を臨む

新病棟エレベーターホール

病棟スタッフステーション

1.5テスラMRI

内視鏡センターの紹介と役割

滋賀医科大学総合内科学講座　教授
辻　川　知　之
（国立病院機構東近江総合医療センター　副院長　消化器内科）

今までの内視鏡検査体制

旧滋賀病院の内視鏡室は救急外来のすぐ隣に位置したため緊急内視鏡の場合には都合が良かったが、ERCPなどで使用するX線透装置とかなり離れており使い勝手が良いとは言えなかった。また、検査台は通常1台のため予約検査＋緊急検査の対応も困難であった。

新しい内視鏡センター整備に向けて

滋賀病院から東近江総合医療センターとして生まれかわる際に新病棟が建設されたが、1階部分は放射線エリアと内視鏡センターが入ることとなった。このため、旧内視鏡室の欠点を解消すべく、また新しい消化器内視鏡の時代に対応できることを想定した。

具体的には

1．気管支鏡検査室も併設した複数の内視鏡

検査台
2．X線透視室と隣接
3．腸管洗浄剤内服のスペース
4．鎮静検査後のリカバリーベッド
を確保できることを目標として、設計に携わった。

平成25年5月にオープンした内視鏡センターの特徴

1．3室の消化器内視鏡室と気管支鏡検査室：合計3つの内視鏡室を設け、最大3台同時に検査可能となった。当初は2台の内視鏡室を稼働させており、時間あたりの検査件数増加が可能なため患者さんの待機日数の短縮につながっている。それぞれの内視鏡室はドア一つ隔てただけで、すぐにスタッフの行き来ができ、検査中緊急時の対応も容易となっている。1室は床面積を拡張し、ESDなどの内視鏡処置でも手狭にならないようスペースを有している（**図1**）。さらに、透視やCTが患者移動なしで行える気管支鏡検査室も併設されている。
2．新しい内視鏡スコープ：検査室数が増加することもあり、内視鏡機器を大幅に更新した。オリンパス社製ELITEシステムと上部・下部のスコープとも290シリーズを導入した。画質が大幅に向上しワンタッチ拡大機能を有しており、診断能向上や検査時間短縮が期待される。
3．デジタルX線透視：内視鏡センター内に最新のX線透視装置を導入した（**図2**）。これによりERCPなど必ず透視が必要な内視鏡検査も内視鏡センター内で行えるようになった。他の内視鏡検査と透視台での検査が同時に行えるだけでなく、無透視検査から急きょ透視に切り替える場合など様々な内視鏡検査が円滑に実施できるようになった。
4．処置薬内服スペースとリカバリーベッド：内視鏡センター入ってすぐにテーブルとソファを設置し、処置薬内服や説明までの待機場所として用いている（**図3**）。また、鎮静化検査に対応すべく、検査後十分覚醒するまでのリカバリーベッドを受付横に3台設置した。現在リカバリーベッドの使用頻度は少ないものの、今後は外来でも鎮静化検査がルーチン化し増加することが予想される。

図1　広くなった内視鏡室

図2　内視鏡室の隣に位置する透視室

図3　リカバリーベッドと前処置薬服用スペース

小腸精査施設として

昨年よりカプセル内視鏡とバルーン内視鏡検査が可能となり、小腸の精査・治療が可能である。近年は東近江地区以外からも原因不明の消化管出血や小腸腫瘍の紹介を受け、湖東・湖北を含めた地域での小腸精査施設としての役割を担っている。また小腸内視鏡の特徴を生かし、大腸内視鏡困難例に対する大腸精査や胃切除後の閉塞性黄疸の精査と治療も行える滋賀県での数少ない施設の一つとしてアピールしていきたい。

内視鏡センター実績と今後の展望

平成24年度は上部消化管1670件（昨年1266件）、下部消化管内視鏡792件（昨年574件）、ERCP94件（昨年82件）などこの2年間で検査数は順調に増加している。今後は大学の第二病院としての役割を果たすべく、高度な消化器内視鏡技術を用いた診断と治療を担保しながら、学生・研修医に対しては大学病院よりも指導教官との距離が近い指導・教育に力を注いでいきたい。

技術と最新設備で外科系診療科を支える麻酔科

滋賀医科大学総合外科学講座　客員准教授
藤　野　能　久
（国立病院機構東近江総合医療センター　麻酔科医長）

手術室前ホール

順調な整備

当院麻酔科は平成22年10月まで常勤麻酔科医は数年不在でありましたが、10月に私が赴任してからは、機器・器材面のみならず書類・体制・システムなどについても少しずつ整備・改善を進めています。

安全かつ満足で快適な周術期

当科の基本方針は、「麻酔科の仕事はCureではなくCareである」という考え方の下、安全を確保しながら周術期の患者の快適性の向上も追求しています。周術期全身管理は、術中においては「鎮痛主体」の麻酔管理を実践し、さらに「術後鎮痛」にも力を入れて、周術期のストレスホルモンの放出を抑制し、患者に「満足で快適な周術期」を提供し「早期回復」を目指せるように心がけています。

術前の診察と説明を週2回の麻酔科外来で行い、入院前に早期に患者評価をおこなうとともに、患者さんに安心して手術を受けて頂けるように配慮しています。手術前には、術前経口補水療法を、麻酔科管理を要する外科系全科で施行しており、午後からの手術でも点滴無しで歩いて手術室に来て頂くことを原則としています。手術室での点滴などの手術前処置も無痛になるように工夫を行い、術前の快適性を向上させるように配慮しています。一方、手術終了後は、できるだけ速やかにかつ清明に痛みなく患者さんに覚醒していただくことを実践し、さらに副作用を最小限にすることに配慮しながら患者自己鎮痛法も取り入れた十分な術後鎮痛法を実践しています。これらの処置の副作用を最小限にし、安全確実に施行するためには、早朝と夕方の毎日2回の病棟回診は必須であると考えています。これを実践することにより、麻酔科標榜医資格者が術前術後に患者診察を施行したときに得られる麻酔科管理料を100%取得できるようにしています。

ハイリスク症例でも断らず、安全に対処

高齢化社会を反映して当院では超高齢者で認知症患者でも特別扱いなく手術の麻酔依頼があり、麻酔科としては個別に十分な工夫をおこなって、安全・適切・確実に対処しています。このように、ハイリスクの症例でも工夫をおこない、ハイリスクだからという理由で原則麻酔を断ることはありません。

麻酔科医に優しい手術室環境

施設としては、本年5月より新病棟移転と同時に手術室も新病棟2階に移転いたしました。写真にあるように、一直線の広々とした廊下の片側に手術室を6室配置し、向かい側には器材庫、清潔器材の搬出路、汚染器材の搬入路、スタッフステーション等を配置し、すっきりして使いやすい手術室となっています。手術室の廊下と並行して裏にも廊下を配置し、その廊下からはスタッフのための更衣室、休憩室、多目的室、カンファレンスルーム、麻酔科医員室などに速やかにアクセスでき、手術室でのスタッフが気分良く最大限に活動しやすくできるように、私自身も新棟建設初期の段階から設計に加わり、ユーザーに優しい手術室になるよう配慮いたしました。

まだまだ整備しなければならない麻酔関連機器もありますが、術中の全身管理のための十分な機能を備えた最新の麻酔器と生体情報モニ

手術室内廊下

手術室内

ターは整備されており、更なる必要機器についても引き続き少しずつ整備をおこなっている途上であります。

質の高い周術期管理の実践をめざす

現時点では、常勤麻酔科医は医長である私一人ですが、ハイリスク症例を含む手術件数が急速に増加しています。当センターの常勤麻酔科医になると上記にあるように、たとえハイリスク症例であっても、懇切丁寧な指導を受けて楽しく質の高い周術期管理を実践できるようになります。当センターの麻酔科医員室は広く、複数人の常勤麻酔科医の受け入れが可能です。さらに労働環境も配慮し、安全に注意しながら超過勤務などの負担が増えないように、工夫・配慮をおこなって質と量を両立した合理的な周術期管理を実践していると他科からも評価されています。

医員室

当院麻酔科はまだまだ発展途上でありますが、着実・確実に整備し続けており、常時新しい情報を取り入れ、常に安全で最良の麻酔管理を提供するように心がけています。

小児科の紹介

滋賀医科大学総合内科学講座　非常勤講師
田　中　政　幸
（国立病院機構東近江総合医療センター　小児科医長）

平成25年度から常勤医3名と非常勤医1名で運営しています。常勤医は平成8年京都府立医科大学卒の田中政幸、平成11年滋賀医科大学卒の赤堀史絵、平成18年自治医科大学卒の木下典子。非常勤として平成11年滋賀医科大学卒の柳貴英が勤務しています。それぞれが小児科の一般診療に加えて神経、感染症、新生児と専門性を持ち診療にあたっています。

我々の役割は入院診療と新生児診療です。東近江医療圏の新生児を含めた小児科入院診療の質をスタッフとともに安全かつ着実に向上させていきたいと考えています。

小児科病棟

勤務内容は、午前一般外来を毎日二診体制で、午後は予約制で専門外来と一般外来をしています。また学生実習を週１２回担当しています。専門外来は小児神経疾患、アレルギー疾患を中心に担当しています。病院小児科として、地域の先生方から紹介していただけるよう努力していきたいと思います。

臨床面では、当院小児科は日本てんかん学会認定の研修施設となっています。研究面では、平成24年度は「マクロライド系抗菌薬が無効なマイコプラズマ肺炎へのステロイド投与期間について」を論文報告しました。行政関連として、東近江市主催の講演会として「てんかんについて」「発達障害について」を、また東近江市特別支援教育推進協議会委員と東近江要保護児童対策地域協議会代表者を委嘱されています。今年度も病院、滋賀医科大学と行政の意思疎通を図りながら診療を進めていきたいと思います。

これからも自分達の診療範囲を増やすとともに、限界も理解して、目の前の子供さんが一番良い治療を受けられるよう「恐れず」、「侮らず」、「気負わず」診療していきたいと思います。

南3病棟（産婦人科）の紹介

滋賀医科大学総合外科学講座　非常勤講師
井　上　貴　至
（国立病院機構東近江総合医療センター　産婦人科医長）

平成25年4月1日付で国立病院機構滋賀病院改め東近江総合医療センターと名称が変わり、旧病棟の南側に新病棟が新築されました。4月25日に患者さんを新病棟に移送、現在新築の新しい香りがする中、診療しております。

7階建の3階部分（南3病棟）について少し紹介しておきます。病床数は、個室および4人部屋合わせて計55床のフロアです。入院診療科は眼科、歯科口腔外科、耳鼻科そして小生が診療しております産婦人科で、いわゆる混合病棟です。ナースステーションを挟んで北側、南側と分かれますが、南側を産婦人科専用として利用しております。分娩後の褥婦さん用に個室を10床用意し母児同室としています。分娩室は広く2床用意しました。今後フリースタイルやLDR（陣痛、分娩、回復室）も視野にいれ、それぞれの部屋にトイレ、シャワーを設置しています。二つの分娩室の間に器材物品庫および胎盤処理のスペースを設け非常に機能的な出来上がりとなっています。分娩室の向かいには陣痛室を2床用意し、スムーズに産婦さんが移動できると思います。分娩室および陣痛室のエリアは自動扉で仕切りを入れています。新生児室はナースステーションの背面に位置し、治療が必要な新生児を収容するスペースを設けました。基本的に母児同室としていますのですべてのお子さんを収容するスペースは必要ないとの判断でシンプルにしています。新生児室の隣に沐浴室（二台）を設置、ゆったりと沐浴および授乳の指導ができるように広いスペースとしました。この原稿執筆時までにすでに6人の赤ちゃんが新しい分娩室で産声をあげました。新しい分娩室ではありましたが、医師も、助産師、看護師の動きも特に問題なく、さらに妊婦さんの頑張りで無事に出産されています。産後の個室の居心地も評判はよかったです。

分娩取り扱い開始時はローリスク妊婦のみと制約をしていましたが、今後はハイリスク妊婦も可能な限り受け入れる予定です。小児科のドクターも一人増え常勤3人となっていますので周産期カンファレンス等で情報を共有し、東近江医療圏の周産期医療の一助となるよう盛り上げていく所存です（言わずもがな婦人科疾患も！）。

分娩室

陣痛室

病院歯科としての歯科口腔外科

滋賀医科大学
総合外科学講座
非常勤講師
堤　　泰　彦
（国立病院機構東近江総合医療センター　歯科口腔外科）

私が平成22年4月に国立病院機構滋賀病院（現：国立病院機構東近江総合医療センター）歯科口腔外科に出向した当初は常勤歯科医師1名体制でしたが、様々な方面からの御支援により、この平成25年4月より常勤歯科医師2名体制となりました。歯科口腔外科を有する病院は東近江医療圏内では2施設。東近江市内では1施設のみであり様々な顎顔面疾患を診察しています。通常の歯科診療所とは異なり手術主体の診療を行っており、主な疾患としましては智歯抜歯、顎骨嚢胞、口腔内腫瘍、顎顔面外傷、顎関節症、口腔インプラント、有病者一般歯科治療等です。抜歯等の低侵襲な症例は主に日帰り手術にて対応していますが、深部埋伏歯や顎骨嚢胞、顎骨骨折など侵襲の強い症例は全身麻酔下にて対応しています。全身麻酔術前には当院麻酔科の藤野先生の御協力により術前経口補水療法を行い、手術室での点滴ルート確保時の疼痛緩和目的に経皮的局所麻酔含有テープ剤の貼付を行っています。また、術後強い疼痛が予想される症例ではIV PCAを用いており、ともに良好な結果を得ています。

当科は病院内の歯科口腔外科であり病院内での活動も行っており、口腔ケアを中心にラウンドを行っております。平成24年4月より周術期口腔機能管理が保険算定できるようになりました。癌患者等の手術（全身麻酔を実施する場合に限る）や放射線治療や化学療法の前後に、周術期の口腔機能管理を行うことより、術後肺炎等の合併症を予防することを期待されています。これによって、治療成績や患者のQOLが向上するとともに、医療費の削減にも寄与出来ると思われます。これは口腔ケアの重要性が評価された結果と考えています。

周術期管理における歯科スタッフの主な役割は

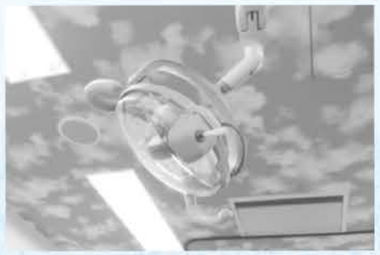
1）手術前の口腔内の感染源の精査と除去及び歯髄炎等の歯に起因する急性痛等による周術期の障害の防止
2）咀嚼機能の回復
3）麻酔挿管時の歯牙破折の予防
4）挿管前の専門的な口腔清掃（プラークフリー）
5）術後の口腔衛生管理及び摂食嚥下機能評価・訓練。

このうち5）につきましては言語聴覚士とともにラウンドしています。

平成25年5月より新病棟へ移転し320床と病院が拡大しましたので、今後症例が増加することを期待しています。この他には、歯周病は第6の合併症と言われており、糖尿病により歯周病が増悪するとされています。また逆に歯周病の慢性炎症を治療することによりインスリン抵抗性を改善させ糖尿病コントロール状態が改善する可能性が示唆されています。糖尿病・内分泌内科医長の前野先生のご協力により糖尿病教育入院患者への歯周病評価および口腔衛生処置を行っています。

最後に、当院では滋賀医科大学の学生実習を行っており歯科口腔外科においても学生実習を担当しています。ただ治療を見学してもらうだけではなく、歯科と医科の関連について理解を深めていただき、今後、医科と歯科の連携をより強められるように頑張りますので宜しくお願い致します。

歯科口腔外科外来



治療時にリラックスしてもらえるように
治療時患者目線の天井を青空の模様にしています。

インフォメーション

平成24年度　卒業式

平成24年度本学卒業式は、去る3月7日（木）午前10時から本学体育館において挙行され、学長から次のとおり告辞がありました。

告　　辞

学長　馬　場　忠　雄

平成24年度滋賀医科大学卒業式を挙行するにあたり、ご多忙の中、ご列席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様ならびに教職員の皆様に御礼申し上げます。

本日晴れて卒業の日を迎えられた医学科109名、看護学科65名の諸君に心よりお祝い申し上げます。また、諸君の学生生活を支えてこられたご家族の方々にお慶び申し上げます。

平成22年度から法人化第二期の中期目標・計画、SUMSプロジェクト2010−2015「次世代を担う人材育成と医療科学・技術の創出」のもとに、全構成員が取り組んでいます。国立大学を取り巻く環境は年々厳しさを増し、平成24年度からの「大学改革実行プラン」では、ミッションの再定義が求められており、今、国立大学として存在することの意義が問われています。本学としても地域のリージョナルセンターとして、またナショナルセンター機能を持つ大学として、この問に答えることが強く求められています。

本学附属病院の診療活動や地域連携などは、リージョナルセンターとして、高く評価されています。すなわち、平成24年3月に病院の再開発は完了し、手術室、新生児特定集中治療室（NICU）、集中治療室（ICU）などの機能が充実しました。診療面では、心臓血管外科の手術は全国的にも高い評価がえられており、その他、がん治療や内視鏡を用いた手術、網膜手術など高度で低侵襲な医療により、地域医療の質の向上に貢献しています。昨年10月の週刊ダイヤモンドで、各種病院機能評価項目による評価で、42の全国国立大学病院で第2位の高い評価が得られています。また、滋賀県がん診療高度中核拠点病院、地域がん拠点病院、災害拠点病院など多くの指定病院であります。地域医療に関しては、地域医療再生計画のもとに、国立病院機構滋賀病院に、総合内科学講座と総合外科学講座をおき、診療体制を整え、地域医療を担うと共に、平成24年度から本学および本学附属病院と連携した学生の臨床実習と研修医の総合診療医としての研修も担当しています。さらに、地域の高校との連携や公開講座を通して健康、医療、福祉に関する情報を積極的に提供しています。本年4月から、開放型基礎医学教育センター（メディカル　ミュージアム）が完成し、地域医療関係者や地域の方々の教育にも活用できることになります。

ナショナルセンター機能としては、研究面で寄与できると考えています。サルを用いた再生医療は、iPS細胞をはじめ他大学や企業との共同研究が活発に行われ、また、インフルエンザワクチンの開発や遺伝的に制御されたサルを用いたがん免疫の研究、MR医学では、ナノダイヤモンドを用いた画像診断への応用、神経難病であるアルツハイマー病の早期診断法の確立、オーダーメイド医療によるがん医療や循環器疾患の臨床応用、医工連携によるMR下対応の医療機器やマイクロ波機器の開発など積極的に行われています。

疫学研究については、疫学研究拠点が平成24年度当初予算で認められており、工事が遅れていますが、アジア疫学研究センターとして平成

25年度に発展します。そして、アジアにおける生活習慣病を中心とした共同研究や留学生の教育により、国際的に貢献することを期待しています。

国の計画養成である医師については、地域医療の充実や研究医の不足と対応して、入学定員増が計られ、本学では117名となっています。ここ数年、医師国家試験の合格率は極めて良い成績を収めており、全国的にも注目されています。看護師、保健師、助産師の国家試験合格率はほぼ100%であります。

医学科では卒業生のうち25名が初期研修医として本学附属病院で研修します。看護学科では、31名が本学附属病院で勤務します。他の病院で研修あるいは勤務する場合でも、本学で身につけた患者の視点での医療を実践し、充実した初期研修を行い、初期研修終了後は、先進医療と高度医療、さらに臨床研究を修得できる力をつけて本学附属病院に必ず帰ってきて下さい。

平成24年度補正予算と平成25年度予算では、臨床講義室3を含む臨床講義棟や福利棟の改修、スキルズラボ棟の設置や体育館の改修、さらに災害時における救急医療に欠かせないヘリポートの設置が認められています。また、本学独自の予算で、内視鏡ロボットのダヴィンチSi、がんの診断に必要なPET CT、スペクトの購入を決定し、教育、診療面でさらに質は向上します。

大学や附属病院の施設や設備が充実しても、それを活用する人材が少なければ機能しません。本学が教育、研究、診療機能において、わが国でトップクラスを維持し続けるには、卒業生諸君の若い力が必要なのです。大学や附属病院で知と技を磨き、その成果を社会に還元することが求められています。医師、看護師の育成には一人当たり多くの税金が投入されています。とくに医師においては一人当たり8,000万円と算出されており、自身の使命と社会に奉仕することを忘れてはなりません。

昨年12月には、ノーベル医学生理学賞が山中伸弥京都大学教授のiPS細胞の研究に対して授与されました。皆様ご承知のように、山中伸弥教授は当初は整形外科医を目指していましたが、臨床医の限界ともっと多くの患者さんを救える基礎医学に興味を覚えました。サンフランシスコのグラドストーン研究所に留学した時、ロバート・メイリー所長から、研究者として成長するには、「Vision & Hard Work」すなわち、明確な目標と一生懸命努力することが大切と教えられ、粘り強く根気よく、高い研究の壁を越えて、iPS細胞にたどりついたのであります。その研究業績が高く評価され、ノーベル賞授賞に至ったのであります。栄えあるノーベル賞授賞式を終えた翌日の12月11日、ストックホルム市内の記者会見の席上、「科学者として仕切り直しする最初の朝であり、たくさん仕事があるので一生懸命にやりたい」と述べ、今の率直な気持ちを色紙に書くよう求められると、迷わず「初心」と記したのであります。すなわち、「研究者を目指した最初の日に戻って、iPS細胞を創薬に役立てるという応用に向けて、これまで以上に研究をやりたい」との意味を込めたのであります。

世阿弥の晩年の著書「花鏡」に、「是非とも初心忘るべからず、時々初心忘るべからず、老後の初心忘るべからず」とあり、修業を始めたころの初心をどの時期においても忘れてはならないとしています。医療の現場においては、「初心」を大切にし、安易に上達したと自己満足することなく、絶えず謙虚な気持ちで研鑽して下さい。

国家試験に合格した卒業生は、国家認定の資格をもった医療人として働くことができます。しかし、その資格は大学で学んだ知識や技能を基に、さらに日々の厳しい研修で、知と技に磨きをかけて、はじめて生きたものとなります。そして、医療人には、倫理観が強く求められ、倫理観を疑う行動は、たとえ知識やすばらしい技があっても医療人としての信頼を失うことになります。「初心」を大切にし、日々の努力を重ね、人格を磨き、苦難に直面しても正面から立ち向かう気概で「志」を高くもって取り組んで下さい。

結びに、諸君が入学時に提出していた決意書を卒業証書と共に、本日手元にお返しします。初心を忘れることなく、志を高く持ち続け、その達成を目指し、「一隅を照らす」人として日々努力を重ねられること、また一人一人幸多からんことを祈念し、学長告辞といたします。

平成25年3月7日

医　学　科

医学科卒業生109名

■平成24年度医学科卒業生

以上　109名

看　護　学　科

看護学科卒業生65名

■平成24年度看護学科卒業生

以上　65名

卒業生謝辞

記念品贈呈

学生表彰

平成24年度　学位授与式

平成24年度大学院学位授与式が、去る3月7日（木）午後3時から管理棟大会議室において挙行され、次のとおり学位記（博士及び修士）が授与されました。

■博士（課程）　18名

（学位授与日：平成25年3月7日付）

■博士（論文）　5名

■修士課程　15名

平成24年度　学位論文学長賞等授与式

平成24年度に学位記（博士）（修士）を授与された者の中から、特に優秀な学位論文を発表した2名に、3月7日（木）の学位授与式において馬場学長から表彰状と副賞が授与されました。

また、滋賀医科大学シンポジウムの各賞・ベストティーチャー賞・優秀研究者・Doctor of the Year, 2012の各賞の受賞者に表彰状と副賞が授与されました。

博士論文学長賞

受賞者名　林　嘉宏

論文題目　C/EBPβ promotes BCR−ABL mediated myeloid expansion and leukemic stem cell exhaustion（C/EBPβはBCR ABLによる骨髄系細胞増殖と白血病幹細胞の枯渇を促す）

修士論文学長賞

受賞者名　志摩　梓

論文題目　就労集団の血圧とその後の医療費、および高血圧者の外来受診頻度と降圧目標達成割合

第29回　滋賀医科大学シンポジウムの各賞

若鮎賞　Lei Liu

審査員特別賞　乾　琢眞

奨励賞　Maryam Zaid

ベストティーチャー賞

生理学講座　教授
松浦　博

優秀研究者表彰

小児科　講師
多賀　崇

Doctor of the Year, 2012

医師臨床教育センター
米岡　完

男女共同参画推進のための講演会

平成25年4月17日（水）、UN Women（ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関）戦略パートナーシップ部長のクリスティン・ヘトレ氏をお招きし、「男女共同参画推進のための講演会」を本学で開催しました。

嘉田滋賀県知事をはじめ学内外から約120名の参加があり、馬場学長による開会挨拶の後、ヘトレ氏より「いかにして男女格差を縮めるか？」をテーマとする講演がありました。引き続き、柏木病院長が座長を務め、ヘトレ氏と嘉田知事との対談が行われました。

対談中、嘉田知事から、「女性の年齢階級別労働力」や「女性医師の就業率M字カーブ」及び「女性の労働参加率と出生率」等の国際比較についての説明もあり、参加者からは、様々な質問や意見も出されました。

最後に、男女共同参画推進室長の谷川理事より、本講演会の成果を今後の活動推進に活かしていきたいとの挨拶があり閉会しました。

ヘトレ氏による講演

ヘトレ氏

ヘトレ氏と嘉田知事との対談

嘉田滋賀県知事

参加者による質疑応答

左から馬場学長、嘉田知事、ヘトレ氏、柏木病院長

名誉教授の称号授与

学校教育法第106条の規定により、滋賀医科大学名誉教授の称号が下記の先生に授与されました。

平成25年4月1日	元教授	吉田 不空雄
平成25年4月1日	元教授	堀池 喜八郎
平成25年4月1日	元教授	木村 博
平成25年4月1日	元教授	岡田 裕作

第36回解剖体納骨慰霊法要

平成25年5月25日（土）午前10時30分から比叡山延暦寺阿弥陀堂においてご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員および学生、教職員総勢約470名が参列し第36回解剖体納骨慰霊法要が執り行われ、故人のご冥福をお祈りしました。

法要の中で、今回お祀りした54名の御霊並びにご遺族に対し、馬場学長から感謝の意が述べられるとともに、日本においては山脇東洋から始まった人体解剖の進歩に伴い、医学専門教育の基本となる解剖実習の重要性を述べられ、学生に対し、「医学教育のために自らの身体を捧げて下さった御霊のことをいつまでも忘れることなく、信頼される医師や人々の幸せに貢献する医学研究者として“一隅を照らす人”に育ってくれることを期待しています。」と述べられました。

続いて、学生代表久保田浩之君が、「多くの方々に支えられて医師になるということを肝に銘じ、解剖実習で得られた知識と経験を礎として、故人のご遺志に恥じることがない医師となるべく努力し続けること」をご霊前に誓いました。

法要終了後、故人（献体者）に対する文部科学大臣の感謝状を学長からご遺族代表にお渡しし、併せて、学生の手によりご遺骨をお返ししました。

また、午後からは比叡山横川の大学霊安墓地において、ご遺族、ご来賓、学生等の参列の下に、納骨式が執り行われ、分骨いただいたご遺骨を納骨堂に安置しました。

学生代表の慰霊の言葉

納骨式でのご焼香